

教材の分析から「型」を取り出し、 考えを整理させ見通しのある活動に

広島県 福山市立向丘中学校

福山市立向丘中学校は県の指定を受け「思考力・判断力・表現力の育成」の研究に取り組む。生徒と共に教材から「思考の型」「表現の型」を取り出し、その型を習得して日常的な場面に活用したり個性的に表現したりする授業を展開。他教科との連携授業も行い、生徒の考える力、主体的に学ぶ意欲を引き出す。

◎課題意識

**学力向上への教師の意識を高め、
意欲的に学ぶ生徒を育てたい**

福山市立向丘中学校は、福山市郊外の閑静な住宅街にある中規模校だ。2013年度の広島県「『基礎・基本』定着状況調査」や文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、いずれも県・全国平均を上回る成績を挙げ、市内では落ち着いた雰囲気のある学校として知られる。09年度、同校は「広島県中学校学力向上対策事業」に名乗りを挙げ、3年間の指定を受けて「思考力・判断力・表現力の育成」

の研究に取り組んできた。その背景を、三島重義校長はこう語る。

「生徒はとても素直なのですが、自信を持って前に出ていく積極性、自分から意欲的に学びに向かう主体性に物足りなさを感じていました。県の事業をきっかけとして、教師の意識を学力向上に向け、生徒の学習意欲の向上を図りたいと考えました」

◎研究の進め方の工夫

**教科混合のグループで
授業を見合い、意見を交わす**

研究は、誤答分析↓授業改善のポイントの

School Data

◎1962（昭和37）年、福山市立水呑中学校と高島中学校が統合して創立。校訓は「明るく 正しく たくましく」。「思考力・判断力・表現力の育成」「規律3要素（挨拶・時間・掃除）の徹底」「部活動の充実」に重点を置く。



校長◎三島重義先生

生徒数◎ 377人 学級数◎ 14学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒720-0833 広島県福山市水呑向丘 107

TEL◎ 084-956-0074

URL◎ <http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/chu-mukaigaoka/>

公開研究会◎ 2014年6月26日（予定）

明確化↓授業研究↓研究協議↓改善策の共有化・評価問題での授業の検証という流れで行った。初年度は、国語・数学・英語で取り組んだが、全教科で研究しなければ学校全体の取り組みにならないという門田剛年前校長の方針により、全教師が研究にかかわった。3教科でそれぞれグループをつくり、国語には理科と保健体育、数学には技術・家庭と社会、英語には音楽と美術が加わり、それぞれの視点から意見を述べた。翌年、理科と社会を加えた5教科、そして最終年度の11年度には全教科へと研究を広げた。

文系・理系・実技系が混在するグループと

*プロフィールは2014年3月時点のもので

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

した理由を、研究主任の飛田美智子先生はこう語る。

「黒板の書き方や発問の仕方、授業の流れ、ワークシートなど、教科は違っても参考になる点はたくさんあります。初年度から他教科も加わったことで、3教科の頑張りを見て、自分たちも頑張ろうという気持ちを持ってたと思います。今は、教師間に教科を超えて意見を言い合う雰囲気根付き、若手教師も前に出て発表する光景が当たり前になりました」

また、公開授業時には必ず外部講師を招き、取り組みの評価を受けている。

「専門的な見地から改善点を指摘してもらい、褒めてもらうことで、先生方に『大変だったけどやって良かった』と効果を感じられるようにしています」(三島校長)

生徒の課題を起点にして 授業内容を組み立てる

研究の最大の特徴は、生徒のつまずきを把握し、原因を明確にして改善点を考え、授業を組み立てていく点だ。

広島県の公立小・中学校には、県内共通の学習指導案の様式がある。一般的な学習指導案と異なり、最初に「つまずきの把握」という項目が設定されている。全国や県の学力調査、定期考査など、音楽や体育などの実技教科では生徒に行ったアンケートなどを基に、生徒がどこでつまずいているのかを明確にする。ここで把握した課題を解決するために「指導改善ポイントの明確化」をした上で「単元の目標」「単元の評価規準」「指導と評価の計画等」などを設定する(図1)。生徒の課題に基づき、授業でどういう力を付けようとしているのかを明示するために、この様式が考案された。

図1 1年生国語「つながりを読む」学習指導案(抜粋)

第1学年国語科学習指導案
福山市立向丘中学校 授業者：飛田 美智子

1 日時 2013年(平成25年)7月10日(水) 6校時
2 学年・組 1年2組(34名)
3 単元名 つながりを読む(教科名「にじの見える橋」「星の花が降るころ」)

【1】 つまずきの把握

平成二十五年年度広島県「基礎・基本」定期状況調査

解答類型	1◎	2△	3△	4	5	6	9	無解答
本校	47.7	10.0	3.1	7.7	0.8	1.5	27.7	1.5
本校の割合(%)	47.7	10.0	3.1	7.7	0.8	1.5	27.7	1.5

この問題を解くために必要な力

- 心情や情景を表す語句について読み取る力
- 描写の効果や登場人物の言動の意味を考える力

誤答分析

○誤答類型4・5においては、みなとの気持ちの変化は記入できているが、問題文の前後にその表現があることに気づいていない。もしくは、問題文から、答えを書こうとしている。問題文と本文を照らし合わせて読むこと、主人公の気持ちが大きく変化したところを読み取る学習が必要なが分かる。

○誤答類型6は、文末が条件に読めない表現になっている。よく見て書くことができていない。

○誤答類型9においては、みなとの大きく気持ちが変わった心情描写ではない描写を抜き出している。主人公の気持ちの変化を場面場面で見つめ、心情描写などの描写をとらえて、どのような気持ちなのかを、しっかり考える必要があると考えられる。

学習指導案は全11項目から成る *同校の資料をそのまま掲載

一方、言語活動は「型」を重視する点に特徴がある。教材や題材、さまざまな資料から活用・表現するための方法や特徴

福山市立向丘中学校校長
三島重義 みしま・しげよし
「生徒、保護者、職員が共に夢と誇りを持ち、活動が輝く学校づくりを目指していきたい」

福山市立向丘中学校
飛田美智子 とびた・みちこ
研究主任。国語科担当。「国語の授業が、将来、人生を豊かにするきっかけになればうれしい」

福山市立向丘中学校
水野直喜 みずの・なおき
美術科担当。「モットーは『至誠』。誠実にコツコツとつくり続けることを大切にしている」

福山市立向丘中学校
前田友香 まえだ・ゆか
家庭科担当。「生徒を、感謝の心を伝えられる人に育てたい」

を、教師が示し、あるいは生徒自身が考え、それを自分たちの活動に生かしていく。学習の手順や考え方が明らかになるため、生徒は見通しを持って授業に取り組める。

同校では言語活動をどのように授業に取り入れているのか、3つの教科を例に紹介する。

言語活動の実践例①国語科 題材から抜き出した「型」を使い、課題に取り組み

13年度に1年生で行った「作家になろう」という授業では、県の学力調査に基づいて、

心情や情景を表す語句について読み取る力、描写の効果や登場人物の言動の意味を考える力が弱いことを課題に挙げ、小説から読み取った「型」を用いて、物語を創作し、発表する活動を行った。活動の主な流れは次の通りだ。

①小説を読み、登場人物の性格や人間関係についてグループで話し合い、図にまとめる。

②心情・行動などの情報、描写や比喻表現などを取り出し、作者の表現の良さを共有し、一覧表にする(図2)。設定・発端・展開・山場・結末がどこかをグループで話し合う。

③読み取った「型」を用いて物語を創る。登場人物や場面を設定し、物語の発端・山場・結末をおおまかに考え、「段落あらすじシート」を使い、600字で下書きをする。

④下書きをグループで読み合い、付せんに工夫点・改善点を書いて意見交換をする。自分が活用した「型」も説明する。

活動のポイントとなるのは「型」の抽出だ。教師は「比喻表現を集めてみよう」「登場人物の性格や考え方が分かる表現を取り出してみよう」などと投げ掛け、生徒の中から「型」になる要素を引き出し、まとめていく。

「生徒が五感で感じたことを、自分の言葉にして発言させることが重要です。生徒の発言をいかに整理するか、教師の指導力が問われる点でもあります」(飛田先生)

国語科では、音楽科と共同で学級CMをつくったり、「走れメロス」を題材に「声優に

図2 生徒が小説から読み取った「型」

<p>作家になろう！ (R) 番号前</p> <p>☆学習したことをまとめよう</p> <p>① 題の付け方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ○主人公の気持ちや変化したきっかけになったものや場所など ○主人公の心の変化の象徴を付ける ○山場の部分を示す (一番盛り上がったところ) ○話の中心を示す ○読者に興味を持たせる付け方 「星のかがり火」では、どんな構図？ 「にじみえる橋」では、どんな構図？ 変化があったと想像できる ○物語の主題になる言葉 ○キーワードを組み合わせている 作家は、話の全体をみながら、読者に様々なメッセージを込めている。 	<p>② 書き始めと終わりの関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ○情景描写・行動描写 ○過去・現在 ○現在・過去 ○疑問・ハッピー・エンド ○気持ちの変化があったことがわかる ○書き始めでは、物語の最後を予告している ○主人公の主題で始めて、インパクトを与える ○セリフでいきなり始めることでインパクトを与えて先を知りたくなるようにしている ○書き出しで話の人物の設定を説明している (お手紙・カレライスなどから) ○読者に疑問を持たせる工夫 (聞いかけ・知らない遊び) ○読者の方の表現が、またこの話には続きがあるという感じを終わって、読者の心に残るようにしている ○登場人物の心情をそのまま表現するのではなく、「青いけむりがつづらから舞い出しました」のようにして、後悔の気持ちや悲しい気持ちを表現して、読者の心に響くようにして終わる
------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

小説から生徒が読み取ったことを、①題の付け方について、②書き始めと終わりの関係、③描写の仕方、④きり表現の4項目に分けて一覧にし「型」とする。生徒はこれを参考にしながら、物語を創作した

* 同校の資料をそのまま掲載

なろう」という朗読活動を行ったりと、ユニークなコラボレーション授業を展開している。

「国語の基礎・基本を身に付けさせるのはもちろんですが、社会に出てからも、言葉を通して楽しみ、心豊かな生徒を育てたいと思っています。面白いと思える経験を1つでも多く積むことによって、『音楽を楽しもう』『劇を観に行こう』などと、生涯にわたって日常生活を豊かに広げていけるようになることを期待しています」(飛田先生)

●言語活動の実践例②美術科

美術での絵画鑑賞を
国語の授業で言語化する

美術科では、課題把握の際に生徒にアンケートを実施した結果、作品制作が好きな生徒が多い一方で、興味を持った技法で作品を

制作する経験が少ないことが明らかになった。

そこで取り入れたのが、マルク・シャガールの技法を使った創作活動だ。まず、マルク・シャガールの作品「日曜日」を「型」として学ぶために鑑賞した。この作品は、画家の故郷ロシアとその時滞在していたフランスの風景を描いている。「美術鑑賞シート」の「どんな建物や情景ですか」「どんな音が聞こえますか」「構成の工夫」「色使いの工夫」などの項目を理由と共に書き、作品に対する理解を深めていく。

次に、国語の授業で、生徒はシャガールの絵の鑑賞文を書いた。ここでも、「型」を意識した活動が行われ、ワークシートに「はじめ↓なか1↓なか2↓まとめ↓むすび」という鑑賞文の流れを示し、それぞれに「この絵は…(空欄)…を表していると思います」(な

言語活動を通じて高める生徒の力

—新教育課程の中間総括として

か1)、「私はこの絵から…(空欄)」(まとめ)といった「型」を示した。生徒はシャガールが作品に込めた思いを自分なりに解釈し、空欄を埋める形で鑑賞文を完成させた。

その上で、美術の授業を行い、生徒は自分の異なる3つの思い出を1つのキャンパスに描いた。普通に3つの思い出を描かせると、生徒は直近のことばかりを描くことが多いが、言語活動を通じて見方が広がり、中には、中学校の入学式と小学校の修学旅行の場面を描いた生徒もいたという。

美術科の水野直喜先生は、「美術の授業での活動を国語の授業に引き継いだことで、生徒がぼんやり感じていたことを言語化でき、鑑賞がより深まったと思います」と語る。

こうした活動を積み重ねていくと、生徒は、作品をより深く鑑賞するようになるという。

「学んだ技法を他の課題に応用する生徒もいます。こうした経験を積むことによって、社会に出た時のものの見方や感じ方も変わってくるのではないのでしょうか」(水野先生)

実技教科の授業は週1回であるため、他教科との連携によって、生徒の学習への意識を途切れさせないことにも効果があるという。

●言語活動の実践例③家庭科

教師の説明ではなく 失敗例を見せて、発見させる

家庭科の前田友香先生は、国立教育政策研

究所「特定の課題に関する調査(技術・家庭)」(*)を参考に課題を洗い出した。その調査の中で「分からないことや興味・関心をもったことについて自分から調べようとしていますか」「自分で考えたり工夫したりすることは好きですか」という質問に肯定的な回答をした生徒が少なかったことに着目した。

箸袋の製作では、まず2つの完成作品を見せた。マチがきれいに縫ってある箸袋と、ねじれている箸袋を提示し、生徒に両方の袋の糸をほどいて分解させながら、どこがおかしいのか、どうしてねじれが生じてしまったのか、その理由を考えさせた。

「生徒は、自分たちが袋を分解し、考えていくことに集中していました。教師が教えるよりも、自分で発見していく方が生徒のやる気は高まります。分かるから自分でも作りたくなるし、出来るようになれば友だちにも教えたくなる。この授業をきっかけにクラスの雰囲気が良いくなり、生徒同士が自ら進んで活動に向かう雰囲気が生まれました」(前田先生)

●成果と課題

普段の授業で「型」に基づく 授業を実践できるかが鍵

研究が進むにつれ、生徒の思考が深まり、学習意欲も増していると飛田先生はいう。

「ヘルマン・ヘッセの『少年の日の思い出』

を扱った時には、最初に読んだ感想文で『なぜ、あの場面で(あいつ)という呼び方をしたのか不思議に思った』『情景描写の中に心理描写が入っているのがすごい』と、授業でこれから読み込ませようと考えていた部分が既に書かれていました。それまで積み重ねてきた学習が生きていることを実感し、とてもうれしかったです」

ただ文章を読み取るだけでなく、「型」をつくり、考える学習を積み重ねたからこそ、難しい作品に出合っても、学んだことを生かして読み込むことが出来たのだろう。

「知識をただ我慢して暗記するのではなく、言語活動を通じて、自分から考えたり結び付けたりしていくことによって、知識を定着させることが出来るようになります。基礎・基本の定着率の向上にもつながっていくそうです」と三島校長は分析する。

今後の課題は、研究授業で行ってきた言語活動を通常の授業に広げていくことだ。

「これからは、普段の単元計画の中で、どこまでこうした言語活動を取り入れられるかが鍵になります。取り入れてある教科が少しずつ増えてきていますが、まだ全ての教師が十分に組み立てられている状態ではありません。家庭学習ともうまく関連付けながら、先生方の取り組みを広げていくことによって、安定的に学力向上に結び付く土壌が出来ると考えています」(三島校長)